



# 自動車の「後始末」の取り組みを世界に広げたい



インタビュー

## 循環型社会への挑戦

会宝産業株式会社 代表取締役 近藤 高行さん

モノを大量に生産し消費する社会構造の中で、私たちの生活は豊かになる一方、地球上にはたくさんのごみが捨てられています。廃棄自動車を解体し、中古部品などを販売するリサイクル業を手がけてきた会宝産業株式会社（石川県金沢市）は、資源循環型の社会を築くための地球規模の取り組みが評価され、第2回ジャパンSDGsアワード（2018年）で「SDGs推進副本部長（外務大臣賞）」を受賞しました。SDGsの目標12「つくる責任 つかう責任」をテーマに、「『後始末の責任』を担つて貢献したい」と語る、同社代表取締役の近藤高行さんにインタビューしました。（取材＝澤田清美、樹下智）

—会宝産業株式会社は、廃車となつた自動車をリサイクルする事業を国内外で展開しています。会社を創業した経緯やこれまでの歩みを教えてください。

私の父が1969年に近藤自動車商会を設立し、私は2代目です。当時は、3人ほどの小さな規模で、自動車の解体業を行なう会社でした。80年代から、自動車のパーツ（部品）を海外に輸出するのを手がけ始めました。

きっかけは、たまたま外国のお客さまがうちの会社に来られた時のことです。自動車を解体した際に出たスクラップ（鉄くず）が山積みになつているのを見た。その山の中にある部品が欲しいと言つたんです。

—解体業という枠を超えて、自動車のリサイクルそのものを事業として確立し、「静脈産業」のパイオニア（先駆者）として高く評価されていますね。「静脈産業」とはどういう意味

海外では日本と違い、年間も走行した車が、普通に使われています。日本では売れない中古品でも二～三があるんです。

“もう使えない”と思うものが海外では、まだまだ使えた。これをきっかけにわが社は、だんだんと海外市場の開拓へと営業方針を変えていきました。

現在は、海外にも営業所を置き、グループ全体で130人ほどの従業員がいます。

—動脈産業」「静脈産業」というのは、経済活動を人体の血液循环に例えたものです。心臓の圧力に押しだされて血液が動脈を流れれるように、生産物が消費者のもとにわたる流れを「動脈産業」と呼びます。一方、血液が再び心臓に戻る際に通るのが静脈ですが、生産物が廃棄された際、加工することで再び社会に流通させる産業を「静脈産業」といいます。

静脈産業の担い手というものは、われわれのような「後始末」を行う会社を指しています。

「動脈産業」「静脈産業」というのは、経済活動を人体の血液循环に例えたものです。心臓の圧力に押しだされて血液が動脈を流れれるように、生産物が消費者のもとにわたる流れを「動脈産業」と呼びます。一方、血液が再び心臓に戻る際に通のが静脈ですが、生産物が廃棄された際、加工することで再び社会に流通させる産業を「静脈産業」といいます。

静脈産業の担い手というものは、われわれのような「後始末」を行う会社を指しています。

3面に続く

こんどう・たかゆき 1974年、石川県金沢市生まれ。地元の工業高等専門学校卒業後の96年に会宝産業株式会社に入社。その後、創業者の父の後を継ぎ、2015年に代表取締役に就任した。世界にリサイクル技術を広めるために、これまで政府機関や、国際協力機構（JICA）などと協力して事業を展開。SDGsの観点からも高い評価を受けている。

